

2023. 1. 15. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書14章1～6節
『答えることができなかった』

本日の箇所には「安息日に水腫の人をいやす」という小標題が掲げられています。これは13;10-17の「安息日に、腰の曲がった婦人をいやす」という記事の繰り返しです。両方ともルカのオリジナル記事としてたいへん分かり易い物語に仕立て上げられています。要するに安息日に病人をいやす正当化の問題でした。

当時の初代教会の主たる働きは、病気の人たちの看護や介助でした。彼ら・彼女らはここに福音の質を見出していたのです。それは、弱く・小さく、そして痛みを持つ者・助けを必要とする者にいつも関わっていなければ人間はダメになるということなのです。

これら初代教会の行為、つまりイエスの福音に対して会堂長(13;14)やファリサイ派(14;1,3)、律法の専門家たち(14;3)が異を唱えるという記事に編集されています。しかし、実際には初代教会内部の対ユダヤ人キリスト者問題であったことと思います。ですから、この問題は決して捨て置くことの出来ない初代教会にとっての大きなリスクだったと考えられます。そのため内容を変えて二度もルカはこの記事をしたためたのでしよう。

本日の記事には、13章の会堂長より「偉い」とされたファリサイ派のある議員が出て来ます。これはエルサレム最高法院の議員を指します。しかもその家の中での出来事だということです。ルカはここで「水腫を患っている人」を登場させます。13章の「腰の曲がった婦人」同様、これらの症状は珍しいものではなく、ごくありふれた病いであつたと考えられます。

病いや障がいを持つ人を福音書記者たちが描く時は、①症状の紹介、②周囲への問い、③本人へのいやしと続きます。①の症状の紹介とは、「病人」という一括りの中でしか認識出来ない第三者に対して「今まさにあなたの眼前にいるこの病いの人」の状況説明なのです。②の周囲への問いとは、「今まさ

にいやされようとしているのはあなた自身である」という病人と第三者の関係性を問い直すのです。端的に言えば、「これは病人という『物』ではない。愛されている『存在』なのだ。あなたも同じ愛されている存在ならば、答えなければならない」という問いなのです。そして、②の問いに対する「答え」に関わらず、③のいやしがイエスによって与えられてゆくのです。

わたしたちは齢を重ねるほど愛することの難しさを痛感いたします。しかし、それ以上に難しいのは、わたしたち自身が愛されているという事実気づくことなのでしょう。愛がこの世にないわけではありません。見渡せば、そして振り返れば、どれだけ多くの人々の愛に支えられていることかと思えます。5節のたとえに示される通り、愛の事実は法の遵守より優先されるのです。しかし、ファリサイ派や律法の専門家たちは、イエスの愛の問い直しに「答えることができなかった」(6)といます。寂しい話です……。

けれども、同じようにわたしたちもあまりに自分本位に固まりすぎてはいないでしょうか。

愛とは、実は他者を愛するより前に、まず他者に愛されている自分に気づく行為として出発しなければならないのでしょう。この反省に立てないとき、「答えることができなかった」ことに陥ってしまうのです。